

福音のヒント 四旬節第5主日 (2017/4/2 ヨハネ 11章 1-45節)

教会暦と聖書の流れ

四旬節第3～第5主日(A年)に読まれる、伝統的な洗礼志願者のための朗読箇所(ヨハネ4章、9章、11章)の3番目の箇所です。これらの箇所は、洗礼志願者がイエスとの出会いを深め、信仰の決断をするのを助けるために選ばれています。きょうの箇所は、病人であったベタニアのラザロが「死からいのちへ」と移されていく話です(今回もまた『聖書と典礼』の短い形ではなく、伝統的な長い形に基づいて話を進めます)。

福音のヒント

(1) ラザロの「よみがえり」は、イエスの復活とは違います。ラザロは地上のいのちに戻されますが、それはいつかまた死ぬことになるいのちです。これに対して、イエス・キリストの復活のいのちは、神の永遠のいのちであり、決して滅びることなく、今もいつも生きているいのちです。このような違いはありますが、それでもこの物語の中に「死からいのちへ」という「超越(すぎこし)」のイメージがはっきりと示され、この中でイエスが「復活であり、いのちである」(25節)ことが宣言されます。

なお、この出来事は、ヨハネ福音書の物語の展開の中で、イエスの受難と密接に結びついています。死者を生き返らせたことでイエスの評判が広まることに危機感を抱いた人々は、イエスをこのまま放っておけない、と考えてイエスを抹殺しようとするのです(ヨハネ11章45-53節、12章9-11,17-19節参照)。



(2) ベタニアという町は、エルサレムの近くにありますが(18節「15スタディオン」は3km弱)。ルカ福音書10章38-42節にも「マルタとマリア」という姉妹が登場しますが、彼女たちの村はガリラヤの近くのようなようです。それでも、ヨハネ11章の「マルタとマリア」とルカ10章に登場する姉妹の性格には、ある共通点があります。ルカでもヨハネでも、イエスを迎えるのはマルタですし、マルタのほうがマリアより行動的だという印象があります。

2節では「このマリアは主に香油を塗り、髪の毛で主の足をぬぐった女である」と紹介されています。ヨハネ福音書ではその話は後の12章にありますから、少しおかしな紹介の仕方でしょう。ヨハネ福音書は、誰もが知っているあまりにも有名な話だからこう言うのでしょうか。あるいはルカ7章36-50節でイエスの足に香油を塗り、その髪でぬぐった女性の話を周知のこととして前提にしているのでしょうか。

(3) 3節の「愛する」はギリシア語では「フィレオー-*phileo*」という動詞で、人間的な親愛の情(友としての愛)を表す言葉です。36節の「愛する」も「フィレオー」です。一方、

5節の「愛する」は「アガパオー-agapao」で「神の愛」というときに使われる言葉です。そのものを無条件に大切にすることを愛を表します。ヨハネ福音書はイエスの愛が、単なる人間的な愛着とは違うと言いたいのでしょうか。「栄光のため」「栄光を受ける」(4節)は先週の福音の「神の業がこの人に現れるためである」(ヨハネ9章3節)と似ています。「ため」は目的を表すというよりも、これから神がこの人に救いの働きをなさり、そのことを通して神とイエスの真の姿(素晴らしさ)が輝き出る、という確信を表している言葉でしょう。

(4) 6節の「ラザロが病気だと聞いてからも、なお二日間同じ所に滞在された」から16節の「すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間の弟子たちに、『私たちも行って、一緒に死のうではないか』と言った」までの展開は少し不自然に感じられるかもしれません。7~10節と16節だけを取り出してみれば、ラザロの物語とは関係ない別の物語と考えることもできます(イエスは危険に満ちたユダヤに赴くが、トマスはそのイエスに従う決意を表す、という話)。ラザロの物語の中の空白の数日間を埋めるために、別の言い伝えが挿入されたのでしょうか。とにかくイエスが到着する前に、ラザロは死んでしまいました。

(5) マルタの言葉「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」はイエスに向かって不平を言っているように聞こえます。しかし、おそらくだれでもそんなふうには言いたくなかった経験があるのではないのでしょうか。「主よ、もしあなたがいてくださったら、こんなにひどいことは起こらなかつたでしょうに!」。ルカ10章40節のマルタの言葉「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか」これも不平の言葉ですが、わたしたちも同じように「主よ、こんなにひどい現実があるのに、それを何ともお思いにならないのですか!」と叫びたくなることがあるかもしれません。マルタはただ不満を抱くのではなく、それをイエスにぶつけます。それはマルタなりの「祈り」だと言ってもいいかもしれません。そして、イエスとの対話の中で、マルタは本当に大切なイエスからの答えをいただくのです(ルカ10章でもそうでした)。自分の思いを率直にイエスにぶつけていくマルタの姿勢、ここにはわたしたちの祈りのためのヒントがあるかもしれません。

(6) この物語の中で特に印象的なのは「イエスは涙を流された」(35節)という言葉です。福音書の中でイエスが泣いたと記されているのは、ルカ19章41節とこの箇所だけです。33節と38節で「心に憤りを覚え」と訳されている言葉も、大きな感情の動きを表す言葉です(新共同訳聖書がこれを「憤り」と訳すのは、「死と滅びの力に対する憤り」の意味でしょう)。さらに、死んで、聞く耳を持たないはずのラザロに向かって「ラザロ、出てきなさい」と叫ぶ姿にも、イエスの激しい思いが感じられないのでしょうか。

ヨハネ福音書が伝える「神的な力を持ったイエス」と「人間的な弱さや感情を持ったイエス」(4章でもそうでした)、この2つの面は切り離せません。ラザロのよみがえりは、単なる超能力による奇跡ではなく、イエスの深いコンパッション(compassion 共感)から起こる出来事なのです。いや、むしろこのコンパッションの中にこそ、「死を超えるいのち」が輝くと言えるのかもしれません。・・・わたしたちも人の苦しみにどれくらい敏感であるかが問われています。